





諸國里人談卷之二

三 石部

○ 惠 柘 泥
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石

○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石

○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石

○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石
 ○ 礮 石



諸國里人談卷之二

三 奇石部

○ 息栖瓶
 ○ 碓石
 ○ 巫石
 ○ 姨石
 ○ 名號石
 ○ 釣鐘石
 ○ 鬼橋
 ○ 龍淵
 ○ 隱水石

常陸 安藝 下野 信濃 相摸 摂津 備後 和泉 紀伊

○ 要石
 ○ 根矢鉾立
 ○ 救生石
 ○ 文字摺石
 ○ 蛙石
 ○ 京女郎
 ○ 石室殿
 ○ 鴉飼石
 ○ 木葉石

常陸 越後 下野 陸奥 摂津 讃岐 播磨 甲斐 出雲

里人談

5

登極鳴動をまのりもあはれ激震の御あはれし其後やう
大に揺え物中へ入るに雷のふくりに鳴動は一途先
福王寺へ西を指り時人丈八人をいでやりく運ぶ
時一人一人あつともし又福徳正則の寺に來ては
一尺一尺お物をあつとせと扇をぬきおきえを縁に雨車抽
雷電して大洪水してづり今も尚寺の什室と云

○根矢鋒五 并麻倉石

越後出羽の界に根矢浦と云ふ海中に因いさき大石あり
徑一兩余ありを根矢の鋒と云はる寄生虫這の上
之の頂よりあつと上とせむつと云ふ皆中逢よりなる
し福子寄生の空貝と云ふ所のあつとあり○又根矢浦より

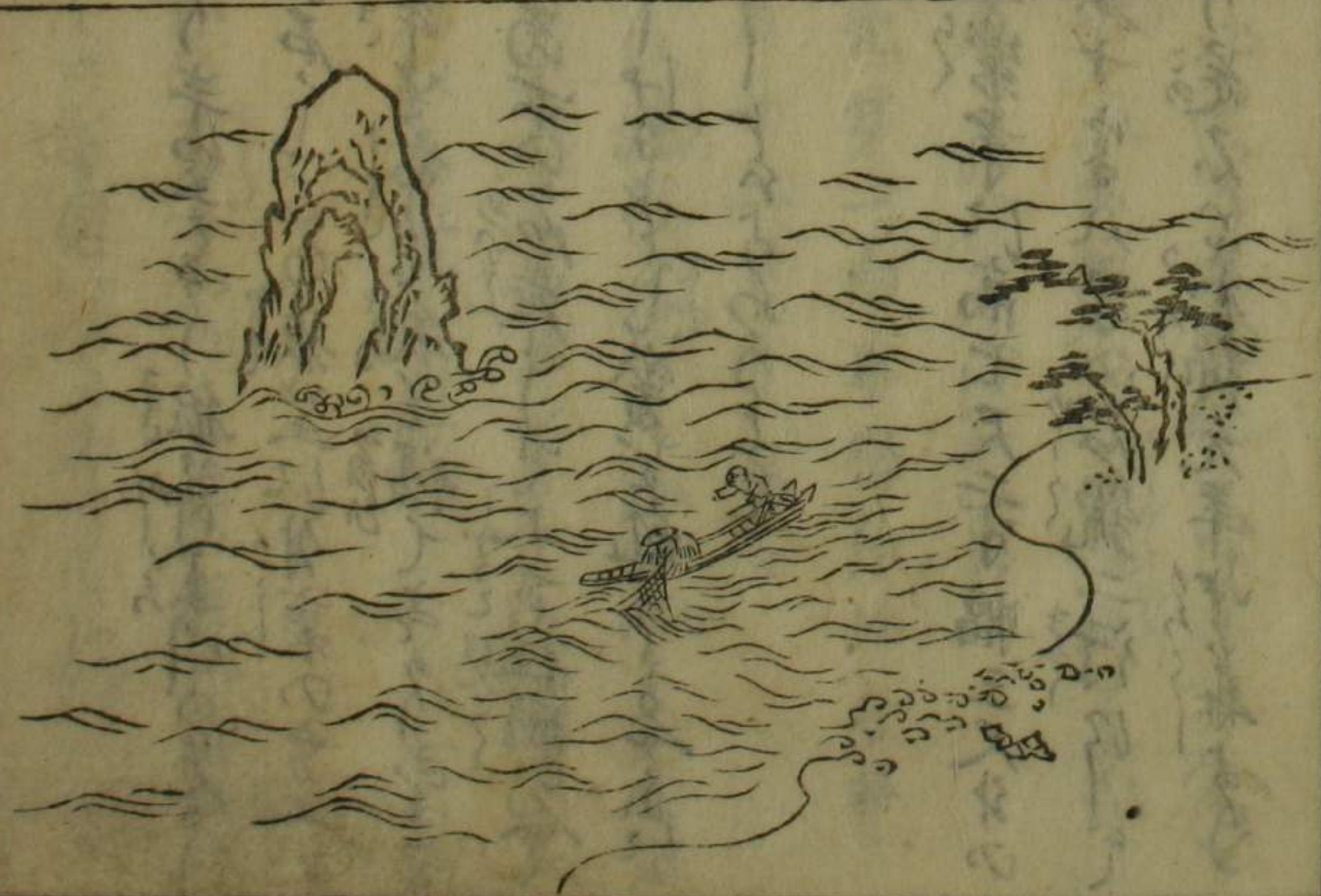
三重出羽のさし嵐園と云ふありは石のまを嵐の谷ら
流のあつとけりてあり

○姨石

信濃回姨捨とい更神影ありを高くせんとあつと云ふ
芝ふなり中傷の姨石ありの姨を捨る所なりとい嚴
高さ六丈五尺横三十丈少なり石屏のあつとけりて一面の
類ひ掃かるといふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
彼光菴より草堂殿と親とたのこみ小敷り
徑をくくひむと云ふ姨石のさしなり十三景と云ふ
絶景し溜池十三景の姨石 冠着高 有明山
一重山 鏡臺山 宝池 姪石 鰐石 小体石

立鋒の矢報

石 硯



椿木 更科川 千曲川 田毎月 等し

大和の信子云信房の玉交神の里にまじり男婦を平らして
 おやのやうくかいつこいその女房はくはくえまよさう
 ーらなむあてて流る物さし山の奥に控えせりされとをい
 男のきりさうかーくそかの心は杯より出るる月をかう先
 一糸月もわたりかかーと入はくくそ音をよそ又いきて
 びくもそきふらうそれありおそそそ心とそ
 古
 我心なくさたうひの交神やかきそそひよそ月をえて
 予一とせおそそくくまうらうらう
 妹控の屋とも 東乃あさう如 沾源
 月乃の孤源云は向の春柳よふて春は茶のうみ流流れは話と

○文字摺石

陸奥國信夫郡にあり柔折らう半里とらう根節田川の先あり長一丈二尺幅六尺とらうの石し石の表に竹裏の字ありわらわらじうしは石の上に忍草と布て衣と優てとらうまをわらわらじの紋あり後より毛尚雨の名産として上古任國の人都への土産にして甚本奪一けりとし髪を礼とらうに紋を摺らうとらう礼をそとらうとらうとらうとらうとらう

○名號石

相模國足柄下郡國府津真樂寺に高七尺寸幅三尺寸の石に觀音上人指し書あり十字八字の名號二行あり其蹟自窟入て文字鮮なり是石は元禄元年申年申年より

一切徑を篠倉と液も其石に此石あり不面鏡のあり上人をえんは石は是石は天竺の石と指し書あり其石の名號あり其後覺如上人回國の時茲にあり石は元禄加へたり

右志者爲鏡空行光第一向專修念佛舍等

其文曰

建武元戌十一月十二日自敬白

或時疾人ありては石と海中に沈び沈く海の面より石を紋の其奈り石を考へ氷練の考を入り石を石に別けんかりとらう川上堂を造り茲に安置とらう

○蛙石

按津國東生郡栢寺村の民家の裏にあり石の形は石のうらまをすし石の頂より割く口をひくく石は石に

多虫を墜し入て又元の虫くく其く蚊のおも春は如く
よめいけ名ありし又ハ殺生石とてつむるなり今ま

○御撞石

攝津國能勢郡大丸村あり大さ方二間あり其形
祇鼓のおとくまこと聲ハ持鐘乃ひききありよめいけ名
ありお徳小貝川三位高御用後の時をくくけり
担歴してとありて祇舞より名のみるなり

○京女郎

一つの形ありあり
よめいけと名ありて二ヶ所あり

○田舎女郎

備後ノ沖に京の女郎田舎の女郎とてあり傳ふの尻橋
に人のまゝありて一處くううんてと京の女郎とてあり

海に傳ふ田舎の女郎の尻橋の女郎のまゝありて其のまゝありて
尻橋を海貌もくくまゝありて其のまゝありて其のまゝありて
まゝありて其のまゝありて其のまゝありて其のまゝありて

○巫石

下野國日光山中禪寺に巫石牛石あり男婦ハ女人境界の
所なり相傳ふ當所巫登山せん事と欲に我神にのり
名なりそ平性あつちの女子ハ異なり何と其崇たかわんやとて自
その土を踏ふて罪ありて牛ハ儂ゆるありて儂ゆる祖そを名に理
ありと牛に殺て禪鏡坊谷ざんきやうを名にその牛立儂直ちやうて死に
巫石と罵詈ののし牛たらまら石と化けに已まり又けく石を
て今にその形を如とてつむるなり○左傳云昔有

貞婦其夫從役遠赴國難攜弱子餞送此山立望夫而化為石因以爲名○幽明錄云武昌北山上有望夫石

○殺生石

下野國那須野にあり方五間とありに垣を圍む毒石人はるも擲ると則死又虫を捉へる石と云ふ毒石なりはるの傍に少流あり那須川と云ふ川ありは川と流り人水も溺れ死するもの多しあり流の毒氣あり少なるも野に於て藤精靈と云ふ流り玄翁和尚教化の事世の人の耳にと傳へり此石に毒あり毒石あり毒に觸る禽獸皆死と云ふ一書云野に於て此石に毒あり

よ其甚矣況之云然も望夫石の事も人の精靈石に毒ありた先しありて巫石牛石野に於てあり

○石燈籠

相摸國小田原の寺に星霜少くも石燈籠一基藪中にあり元禄年中あるの天守淫營の砌に神田の棟梁小村何某天よりして此石を移し置るに左官棟梁深三と云ふものけりそらと見せし大棟梁の言を云比叢の黒凡の燈籠なりと云ふ所よりして用之任僧にありと云ふに連も藪中に埋もてるものいとかなしとて移し置るなりんを云ふなりと云ふ後小屋を運ぶに火袋竿を以てしんくに葉を覆へて置くを云ふ

菟庭とふ葉を傳ひ行作りて、此出さるるに、人運道
 せん事とせり一夜下部の共大熱して、狂氣のふくく云事皆
 焼あつたるに、何ゆへに、印を他國へ送るがら、其事
 之傳るに、案のつと、人々驚き、あまの元の事、
 一、住僧の云い、その何事、用いさるるや、と云ふ、
 事とせり、あつたるに、念す、事あり、此事、二と云ふ、
 事あり、事あり、五三日、経く、事あり、おのぬ、ぬ、
 國され、何ゆへに、之を、之を、之を、之を、
 後、之を、之を、之を、之を、
 墳に、樹を、栽、立、輪、石、塔、を、之を、其、要、を、
 あり、け、焼、け、も、巫、石、殺、生、の、事、之を、
寺号連可考

○石宝殿

播磨國印南郡生石子の神社なり、
 土、之、體、あり、大、十、二、丈、大、あり、所、之、人、力、の、
 じ、一、台、万、の、祐、之、ら、あり、之、を、造、り、
 大、あ、じ、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
 生、石、子の、神、の、祭、大、巳、貴、命、火、彦、名、命、と、
 寛、文、の、十、二、二、年、の、女、け、あり、之、を、
 なる、事、あり、之、を、之、を、之、を、之、を、
生石神社

○鬼橋

備後國帝釈山の谷川に橋あり、之を、切、之、を、長、三十、間、
 幅、三、間、の、及、橋、あり、之、を、鬼、橋、と、名、く、土、俗、の、
鬼橋

梵天帝教天々うらなひの春属は鬼外にて一極の舟に
今く成るといふるもいづれに極をこえりて極まで
ゆくは後りゆるもの地獄に墜つて今くも今くも
年本生後りいふとひきき

○鶴飼石

甲斐國石和川日蓮上人漁丈善托の法華經一巻の
一字は去て川の流ぬ吊ひ流すといふその文字清く
け川をうめり筆來る極むはうて今適におとと降ると
おことい極者の筆流奇なりといふ一〇又凡人の石は去て
濃き法あり茶耳子の油はく雲とまうて石は虫附へる
中に通るて濃きといふは茶耳子の油をおをよく通る

もの故に何の意に入ても漏らし但手は石に金とて

○龍淵

和泉國磐田郡家系寺の心のくは龍淵と云なり
徑り七八寸の穴あり其中の水早天に涸れ霧を以て
も早魁の附けるも雨を以て強あはれといふは
其傍に白龍淵といふあり人か一窟あり隙はく雨
は一滴たすは深く深入て流るる

○柏葉石

陸奥國南部佐々木氏の墓穴大所の用基なり大所
は心も後摩修のあり一附遺席なるを柏の葉
をとりて石のくはあはれといふその石字ニ文とて



唐く耕て去三寸幅一寸とらうの拍の葉の形にして文様ありあむ人あむと移りて去、焼山の事垂り山野部に見

○隠水石

紀伊國那智山阿弥陀寺の門前に高七尺の大岩に穴あり湖の満りにささうひは穴の水増減に妙法山河泥泥寺とらふ唐の惠果和尚法法の傍あり大伴自休俗に女人の高野とらふは西なり

○木葉石

出雲國敷崎大社 并築大社より石あり紋石とらふ楮葉の石の如くあやれ勝るるふくくまこと割り中に花あり上社の素戔嗚命 下社の天照太神し其石除夜に祭あり

○焼石

越中國立山阿彌陀の焼く懐の焼石と云ありむくくは秋の川邊より止宇呂庄とらふ女僧ありあや元よりあむい女人結界の地ならし推して泰人としてとらうて壯の女一人童女一人侍ひける。湯川の上には壯女忽化して杉の本とたうてり毛を女が云り彼童女怖く進み海に老女屎とてあうくは海をえり去りよ其言その尿の跡をたうてり深き草叢殊とてをたうては西又板のくくあむ海傍に女角をひて忽と成地を毛を焼く角の什宝として今にわうと云

○水口石

近江國石橋にさる橋の大井と云隈もあむ大力の女ありける

田(あ)より(こ)る(里)人(水)を(激)し(大)井(子)の(田)の(水)を(入)
ら(り)る(大)井(子)ま(さ)し(に)お(も)ひ(一)夜(六)七(尺)さ(ら)の(水)を(出)
す(と)物(多)く(水)の(重)く(あ)る(め)に(水)を(流)し(ける)の(罪)
(里)人(も)と(て)大(き)く(お)も(ろ)き(退)き(ま)れ(る)中(に)く(百)全(う)
め(て)も(多)く(と)く(勤)勞(し)ま(る)あ(ら)の(水)下(着)の(田)を(潤)く
物(成)に(な)す(一)二(月)の(間)に(て)今(う)ら(い)の(所)に(あ)る(ま)
る(と)く(と)し(也)を(修)む(と)作(の)を(と)く(一)と(あ)る(と)
(川)邊(け)の(水)を(大)井(子)の(水)と(て)今(に)あ(る)

○月糞

長(法)田(流)の(村)の(村)に(月)吉(村)日(吉)村(と)あ(る)け(西)秋(が)
あ(る)と(あ)る(毎)に(降)も(の)あ(る)長(四)寸(と)る(螺)貝(の)壳(と)く(屈)曲
り(て)色(層)白(き)く(と)し(ち)ま(と)月(の)糞(と)い(ふ)

○星糞

信(法)田(長)村(田)の(ま)に(星)糞(と)い(ふ)あ(る)あ(る)長(田)耕(ま)と(る)
土(中)より(掘)出(せ)し(色)く(と)る(麻)に(て)性(の)多(く)弱(く)に(似)たり
大(き)く(あ)る(穢)し(極)に(の)欠(る)物(の)を(角)なら(る)け(地)の
他(の)より(流)入(を)多(く)あ(る)と(て)流(入)あ(る)と(い)は(る)
ま(さ)と(あ)る(一)つ(と)も(星)糞(と)い(ふ)

○神石崖

出(羽)田(秋)田(の)に(男)麻(穂)の(五)六(里)に(在)り(海)に(さ)り(お)る(所)を(
六)陸(田)より(海)迄(十)余(里)の(船)が(五)里(と)う(て)本(山)勢(の)ま(た)の(岸)に
男(麻)村(と)り(海)の(り)ひ(の)林(海)邊(に)岩(崖)あり(神)石(崖)と(い)ふ

俗に鬼ヶ岩といふ方十間と入の洞あり上は五色花大石洞の口
 湯ひくく入る一町餘り奥に女の平地あり方
 方八九尺の穴あり先年此穴の行者ある人然るに入らば
 凡一里行くと所なる岩その奥とくくして解く
 ことあり○取上岩 大石のふちより入るのふちより海
 岸あり波をきき上の上のふちと浪めくおる
 行者くまき岩ありてをのきことなるふちより奇し
 土人の言葉にけしはるの落しより入るふちより
 と云り○永澤崖 けしはるのふちより入るふちより
 入るてけしはるのふちより入るふちより
 ○蝙蝠崖 蝙蝠ありてけしはるのふちより七人

叫ぶ百人の樹神に○大山橋 小山指 鳥居のありて大石
 にせり石高さ四間と入りその石はけしはるのふちより
 間二十間大石の橋と二十之橋あり風景松橋あり
 入り橋ありの形三三三○奉心真福寺と云天台宗之
 女人結界地けしはるのふちより入るふちより
 ○鶴石 石
 伊勢國度會郡と田より西南五里と云一の所の中村の
 里に水川に鶴石ありと云ありて石面平にして石の
 高さ九間と云ありて石の長二十間
 ありて石の東に石の傍より石の傍より
 石の傍より石の傍より石の傍より
 石の傍より石の傍より石の傍より

その志の由も、入口 湊の音、契 湊の音、見 湊の音、らん 湊の音、あき 湊の音、く 湊の音、ら 湊の音、る 湊の音、事 湊の音、却 湊の音、り 湊の音、
少ありこの志の由も、あ 湊の音、つ 湊の音、く 湊の音、し 湊の音、唯 湊の音、る 湊の音、中 湊の音、に 湊の音、神 湊の音、人 湊の音、あ 湊の音、り 湊の音、
御つるも、目 湊の音、本 湊の音、に 湊の音、雙 湊の音、の 湊の音、奇 湊の音、る 湊の音、し 湊の音、び 湊の音、く 湊の音、物 湊の音、言 湊の音、を 湊の音、
こと、好 湊の音、事 湊の音、の 湊の音、異 湊の音、也 湊の音、と 湊の音、も 湊の音、有 湊の音、て 湊の音、今 湊の音、務 湊の音、終 湊の音、る 湊の音、と 湊の音、云 湊の音、その 湊の音、怪 湊の音、
その怪、を 湊の音、の 湊の音、方 湊の音、も 湊の音、る 湊の音、う 湊の音、三 湊の音、十 湊の音、間 湊の音、し 湊の音、固 湊の音、而 湊の音、を 湊の音、り 湊の音、十 湊の音、間 湊の音、も 湊の音、略 湊の音、し 湊の音、

○ 湊福石

上列 湊福石、ふ 湊の音、り 湊の音、福 湊の音、石 湊の音、と 湊の音、云 湊の音、あり 湊の音、ゆ 湊の音、三 湊の音、横 湊の音、九 湊の音、七 湊の音、寸 湊の音、入 湊の音、の 湊の音、大 湊の音、
なり、少 湊の音、し 湊の音、と 湊の音、多 湊の音、も 湊の音、有 湊の音、り 湊の音、と 湊の音、動 湊の音、く 湊の音、事 湊の音、奇 湊の音、し 湊の音、○ 湊の音、神 湊の音、足 湊の音、石 湊の音、
一尺四寸、入 湊の音、六 湊の音、七 湊の音、寸 湊の音、あり 湊の音、足 湊の音、の 湊の音、長 湊の音、一 湊の音、尺 湊の音、半 湊の音、あり 湊の音、也 湊の音、云 湊の音、其 湊の音、石 湊の音、は 湊の音、長 湊の音、一 湊の音、尺 湊の音、半 湊の音、あり 湊の音、
捨取の法、是 湊の音、の 湊の音、法 湊の音、と 湊の音、云 湊の音、○ 湊の音、大 湊の音、神 湊の音、二 湊の音、間 湊の音、と 湊の音、り 湊の音、の 湊の音、石 湊の音、は 湊の音、長 湊の音、一 湊の音、尺 湊の音、半 湊の音、あり 湊の音、
云の産、水 湊の音、に 湊の音、生 湊の音、じ 湊の音、瘰 湊の音、癧 湊の音、を 湊の音、以 湊の音、て 湊の音、念 湊の音、じ 湊の音、く 湊の音、神 湊の音、愛 湊の音、なり 湊の音、

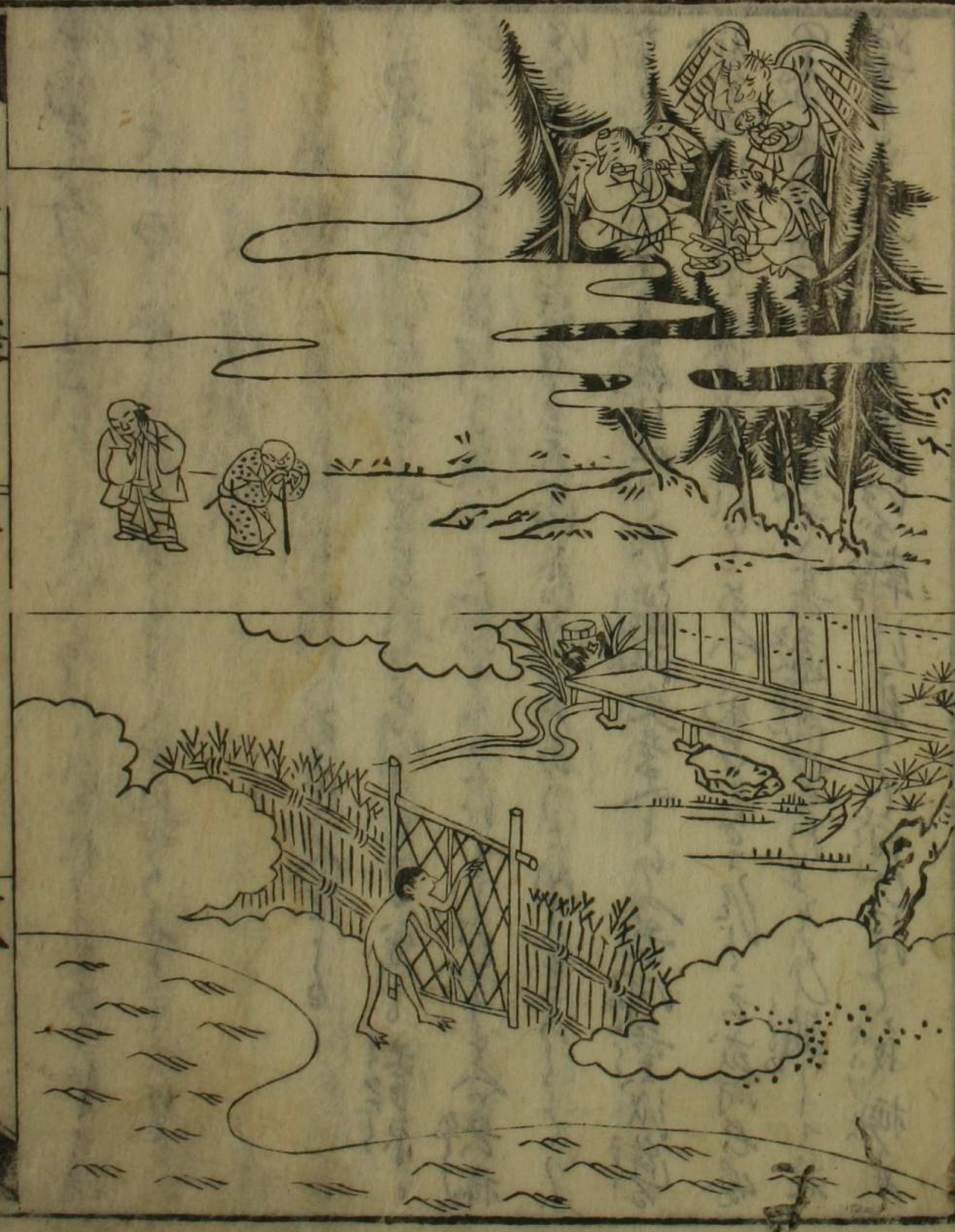
四 妖異部

○ 成大会

永美の頃、西 湊の音、塔 湊の音、の 湊の音、僧 湊の音、高 湊の音、も 湊の音、あり 湊の音、海 湊の音、白 湊の音、以 湊の音、東 湊の音、北 湊の音、院 湊の音、の 湊の音、山 湊の音、大 湊の音、路 湊の音、と 湊の音、
童部とも、あ 湊の音、つ 湊の音、り 湊の音、古 湊の音、考 湊の音、と 湊の音、終 湊の音、り 湊の音、か 湊の音、め 湊の音、て 湊の音、故 湊の音、を 湊の音、そ 湊の音、弁 湊の音、せ 湊の音、
り、は 湊の音、僧 湊の音、並 湊の音、並 湊の音、と 湊の音、終 湊の音、り 湊の音、し 湊の音、廟 湊の音、な 湊の音、と 湊の音、童 湊の音、と 湊の音、と 湊の音、い 湊の音、ち 湊の音、り 湊の音、て 湊の音、意 湊の音、成 湊の音、て 湊の音、
紋、や 湊の音、り 湊の音、り 湊の音、その 湊の音、先 湊の音、の 湊の音、教 湊の音、の 湊の音、中 湊の音、より 湊の音、異 湊の音、を 湊の音、有 湊の音、る 湊の音、法 湊の音、師 湊の音、と 湊の音、ら 湊の音、
先、に 湊の音、心 湊の音、懐 湊の音、を 湊の音、し 湊の音、み 湊の音、今 湊の音、と 湊の音、も 湊の音、も 湊の音、と 湊の音、い 湊の音、は 湊の音、る 湊の音、その 湊の音、礼 湊の音、を 湊の音、辨 湊の音、ん 湊の音、ん 湊の音、と 湊の音、
し、僧 湊の音、か 湊の音、ら 湊の音、ひ 湊の音、り 湊の音、一 湊の音、尺 湊の音、半 湊の音、あり 湊の音、也 湊の音、云 湊の音、其 湊の音、石 湊の音、は 湊の音、長 湊の音、一 湊の音、尺 湊の音、半 湊の音、あり 湊の音、
お、山 湊の音、東 湊の音、北 湊の音、院 湊の音、の 湊の音、山 湊の音、大 湊の音、路 湊の音、と 湊の音、云 湊の音、其 湊の音、石 湊の音、は 湊の音、長 湊の音、一 湊の音、尺 湊の音、半 湊の音、あり 湊の音、
ゆ、れ 湊の音、を 湊の音、い 湊の音、は 湊の音、ら 湊の音、も 湊の音、何 湊の音、事 湊の音、な 湊の音、ら 湊の音、ん 湊の音、と 湊の音、思 湊の音、は 湊の音、る 湊の音、事 湊の音、行 湊の音、せ 湊の音、ん 湊の音、と 湊の音、
さ、ん 湊の音、の 湊の音、事 湊の音、も 湊の音、い 湊の音、わ 湊の音、ら 湊の音、る 湊の音、事 湊の音、な 湊の音、ら 湊の音、ん 湊の音、と 湊の音、我 湊の音、出 湊の音、が 湊の音、の 湊の音、事 湊の音、を 湊の音、終 湊の音、せ 湊の音、

世の望みの如く一々一秘の如く靈山ありて後法一秘の如く一秘の如く
 凡そ秘の如く一々一秘の如く靈山ありて後法一秘の如く一秘の如く
 以て目を覚めて居る秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 も貴く一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 去る如く一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 靈山ありて後法一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 坐に坐りて一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 音樂を奏し一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 ありて後法一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く

一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 水飲の如く一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 信者と誰と一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 も近き一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 ○ 森羅
 享保の如く一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 不悉の如く一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く
 森の中を折り一々一秘の如く一秘の如く一秘の如く一秘の如く



股川岸の縁よりさびく葉色を扱ふかえぬよ今
 主人よりきりかへておろく御さくまふと今と解き
 さくまふとさくまふとさくまふとさくまふとさくまふと
 観を出一色をめぐせむ野老くさくまふとさくまふと
 てまぬまぬ人の云今御いふさくまふとさくまふと
 をさくまふとさくまふとさくまふとさくまふとさくまふと
 へさくまふとさくまふとさくまふとさくまふとさくまふと
 けしきの今と其さくまふとさくまふとさくまふとさくまふと
 さくまふとさくまふとさくまふとさくまふとさくまふと
 さくまふとさくまふとさくまふとさくまふとさくまふと
 てさくまふとさくまふとさくまふとさくまふとさくまふと

を割てきつた其代としていつあるもの化してありける後
ほしそいふりぬる後何の事をもさくせんきりあをきりける

○河童歌

肥前國諫早の名より河童歌くありて人をとる

ひやうまの川ならせしとさればよ川から男我も菅原
は奇と出て海河子流せと害とさばくしひやうまの無様
はく下のかしは材より天満まのやありてさうりつと
かろく一〇又昔傳の山に流江文更とらあ若河童は流る
狩と出は狩と懐中さしとめて害とさばく云成河童は
の番士海とらよと殺て其遠也とあさくは精一と
ぬ事とある一毎流江が軒にありて白けはく我梅

日毎も殺ておとらした是事ら海に人々災をさす
と流江の歌くあをきりぬ人皆奇なりとん

○鬼女

享保の頃ぬ三河國係飯那第村新也とらふとけ女房 年二十五
赤髪より具してあつたる常にか尖りて唯ね人のみく
がらふまの事と倦て出奔しつり其跡とさくは遠列新井まで
追尋されとも所國前とある事あつたむかしく悔り
有し女子住て益嗔悪の痛は人にて乱れあつて折言流家
に死せるものあり田舎のやうにあつたあつた追言我梅の中にて火
葬しける彼女はあつたて半焼する死人と川出し飯と割
臓腑とつと出し飯と割の袋を今索類なりと吟あつて

登りける石の跡をの火のわらふと云ふはけしきやとて
登りて村中捧膝本はくまきと遊女大に怒りけし味ひの
味もくへしと濁りわびて蝶々のかゝり翹翔てけし
なりぬその夜近き志の志でいなつてつれなき肉と出
してけし僧侶のきき早急く里へきせし村民
あつる彼女はけしきとくまきと云ふもさうして後
たはねと遊女といひくく鬼女となりけし
年月代々を傳へて世に聞えりけし

○四屋敷

正保年中玄士の下女十の罽を二井に居る種いふに害
せし其七弱果く井の隅にありて下より名を築つて

泣叫と云事々々々世に知らぬは古井の敷敷
はわらふ雲列おほいけの井あり又播列あり其種皆の
りきし二亦も真あるり二亦もいけり一四律の元孫附合の流

○嵐女

播列を志郡川俣川敷り子方一丈余の志嵐あり寛文の
ころは嵐の中に入り川向の村より嵐をきてあやむ
里人幾と担てその子ある二十さうの女髪をみけり
きけりて髪をきたと上の嵐を漆膠とけりておほいけ
るけりてその髪はけりし中に入り里人抱きかゝる人
髪をみけりし中より髪を切りて里人抱きかゝる人
かきわらふれし正保中なるぬきかゝると同くさう後と云

以曾原水就其村の長の妻なるよりと云はれしは此の傳をが
此の所を流るるより流列をうらぬる途の老た舞あがくし傳を

○天狗遊石

佐賀國園山むじうより天狗の控ひやと云はるる所あり方八
尺より以上上平に切きるおとくかむがふの雁屋ありて実
處さちありへりやる切あし室水のころ大守廣西の乳母を
眞きこしとて其の玉を穿て谷つらおとくはもを何のうか
るる大坊の人まといて日毎におもひをいりて上野城下の坂口
より一里をうらの西より行るるを日毎に大雷雨して雷地獄
覆はるて今まといをいりて入るるをうらむ方に静まゆりお
ゆの心程中いえのこといふ所してわづらえくを業と止む

○本葉天狗

駿遠の境大井川に天物をるる事あり國から夜深文に
およんで海に封壇塘の海に志のびてうらぬれをのまくと
い翅の怪り六とありある大鳥のやうなるもの川面におよぶ
ありとありとありて魚をとるのせしきし人言はれぬに
おとす是は俗に云ぬおとす木の葉天狗なりと云ふはたん

○斤輪車

近に四甲賀郡に寛文のころ斤輪車と云ふもの傳あり
車の張き一して行ありづもよりおもひをきく人通に
おとすおもひをいりて前後をそむはあは夜更に
はあは人ぬり市町も門を閉て静るは事とおほす

こがすよりあをを言ふまゝにたわつと崇あつたさうなうり子怖らび
一向いぢやもきりてぐりて家の女房おをを足ちく海一りりひ
りのまのあつ耐船に戸の如くよう取ももと宰人あおき車の
所輪なるりて又廿一人あつたやまけいんて車どとめ裁する
より色は子とさんよと云いおとらめ野子入て入るごと二日かゝり
りまらとふりさるるまゝの難出めとをるかや一かの
毎一首をきき戸に隠してさうり

飛脚にて我はよくあき小車のやうにさるるもさうから
その後所輪車圓はうたうのよみえあつて一の若う船にさるるを
しんがくあはるいあはるいしつひけらうと後あつた

里人談二終



